

肝移植後の感染症発生の危険因子の検討

九州大学第二外科において1996年1月から2010年12月までに肝移植の手術を受けた方を対象としています。

【はじめに】肝移植は末期肝不全の患者さんにたいへん有用であることは知られていますが、術後の重篤な合併症として感染症があります。感染症の内訳として敗血症、手術部位感染症(Surgical site infection)などがあり、いずれも致命的になりうる合併症です。これらの感染症の原因として様々な要因が文献的に検討されてきましたが、生体肝移植における栄養状態・管理と感染症の関連を示した報告は少なく、いまだ不明の点が多くあります。

【研究内容】

当科において1996年1月1日から2010年12月31日までに肝移植を受けた患者さんを対象として、とくに術前の経口アミノ酸製剤の有無、術中・術後24時間以内の血糖コントロール、術後の経腸栄養投与の有無などに着目し、臨床データを解析します。本研究の目的は、過去の症例の観察研究による知見をもとに感染症の危険因子を明らかにすることです。

【患者さんの個人情報の管理について】

本研究の実施過程およびその結果の公表(学会や論文等)の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。もし対象となることを希望されない方は下記連絡先までご連絡ください。

【研究期間】

研究を行う期間は承認日から平成25年3月31日までです。

【医学上の貢献】

この研究により、肝移植後の感染症の危険因子が明らかになれば、感染症を回避できる可能性があり、今後の肝移植成績の改善に役立ち、医学上の貢献があるものと考えます。

【研究機関・組織】

九州大学大学院 消化器・総合外科学

責任者	教授	前原 喜彦
	診療准教授	調 憲
	講師	武富 紹信
	講師	吉住 朋晴

連絡先: 〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel:092-642-5466 診療准教授 調 憲